

---

# アネラ

終野真冬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アネラ

### 【Nコード】

N6912Z

### 【作者名】

終野真冬

### 【あらすじ】

『はい、先生』

お子様中学生と気苦労のたえない塾講師。

幼馴染の二人は、今年私立受験を控えていて

。

青年×少女 現代・短編

## 1・絶対安全領域

「きょーちゃん！」

冷たいリノリウムの床をキュッキュツと鳴らし、足音が近づく。

その声の持ち主は、どう考えても一人しかおらず、俺はため息をつきながら振り返った。

「はな……ここでは先生って呼べって言ったろ？」

「あ……えへへ、忘れてた」

何度注意しても直らないその癖に、もう諦めかけているが、言わずにはいられない。

大体このシチュエーションがおかしかった。

どうしてわざわざ、俺の勤めている塾に、幼馴染が通っているのか。まったく意味が分からない。

バツが悪そうに、はなはえへへと舌を出して笑う。

その仕草は、中三の女の子がするには幼いのに、はなには妙に似合った。

「今日も家行つていい？」

「……ああ、来いよ」

「やったあー。きょーちゃんの Pasta 食べれる！」

バンザイを連発し、身体中で喜びを表現する幼馴染に、クスクスと笑いを零す。

今日の我が家のメニューは、強制的に Pasta になりそうだ。

まあ、俺も嫌いじゃないし、美味しそうに食べてくれるのだから悪

い気はしない。

「今日って、例のディナーショーか？」

「うん、多分ね。お母さん、朝からはり切ってたし」

友人同士の俺たちの両親は、俺にはなの面倒をおしつけ、自分勝手に用事を入れる。

最近は、それにも慣れてきて、まったく逆らう気にならない。

というよりも、はなを一人の家に置いていく位だったら、俺が面倒を見ていた方がマシだと気づいたからだ。

一回、はなに留守番を頼んだことがあったが、あれはひどかった。スパゲティを作ればラーメンが出来、洗い物をすれば食洗器が壊れた。

あれから俺も学習して、はなには包丁の一本も持たさないことにしている。

下手したら、コケた拍子に包丁が飛来して、誰かのわき腹にぐっさりというのもありえるからだ。

少なくとも俺はそんな被害に遭いたくない。

だから、どんなに面倒でも、他の連中にバレたら厄介でも、はなの面倒を見ている。

「はな、他の生徒に俺のこと言うなよ？」

「え……どうして？」

「どうしてって……」

言わないでも分かれ、この馬鹿娘。

仮にも塾の講師が生徒の一人を家に連れ込んでると知れたら、俺は解雇だ。

職を失つたらどうしてくれるなんて、はなに言っても無駄だろう。別に幼馴染なんだからいいじゃんとか軽々しく言い返されるに違いない。

大人の世界に、幼馴染なんて言い訳が通じるわけない。

何かを伝えることを諦めて、ため息をつく。

誰かに見られないように、身体の陰に隠して鍵を渡した。

「……もういい。先帰ってる」

「はい、先生」

行儀よくお辞儀をして、はなは去る。

呼ばれた『先生』という呼称に違和感を感じて、俺は首を傾げた。

\* \* \*

「あのね、この前おばさんと話したんだけど」

「……おふくろが何だった？」

俺が調理している間、はながやった問題に丸をつけていく。

途中三ヶ所ほどスペリングミスを見つけ、内心落胆する。

はなに何度言っても、ケアレスミスが減らない。

いつも、ちゃんと見直してから提出と言っているのに、中々直らない。

「おばさんの料理が美味しいから、娘になりたかったって言ったの」

「あー。まなさん、不器用だもん……」

はなの母親のまなさんは、はなによく似て不器用だ。それに比べ、うちの母親は平均的な主婦より少し出来るくらいか。まあ、飯が不味かったことはないから、俺はそれで満足している。最後に点数を書き込み、はなに手渡す。

「ほら、答案。問4の？間違ってるぞ」

「あ……ホントだ。うえー、苦手なところじゃん」

「お前、いつつも同じとこばっかり間違えるよな」

一息ついて、傍らのマグカップからホットウーロンを飲んだ。俺の返した答案をじいーと睨むはなは真剣で、問題文と答えから目を離さない。

他のこともそれくらい真面目に取り組めば出来ないことはなさそうなのに。でも、料理だけはしないでくれると、俺の胃が助かるのだが。

「本番は、そこ落とすなよ」

「……わかってるよー」

私立の受験はたった1問が命取りになったりする。

ケアレスミスなんかで、不合格になったとおふくろに知れたら、俺が怒られる。

あんたの指導力不足よなんて幻聴が、今にも聞こえてきそつだ。

「それでね、おばさんなんて言ったと思う？」

「うーん、おふくろがね……」

過ぎたことはしょうがないと諦めたのだろう。

いそいそと答案を鞆に仕舞うはなを横目にマグカップに口をつけた。

「京大と結婚してくれたら、いくらでも作ってあげるわよだって」  
「ぶっ……!?!?」

吸い込んだものを思いつきり吹いた。

言葉の意味が理解できず、目を白黒させる俺をよそに、はなは勢いよく立ち上がる。

「だから、はな。頑張るね!」

ご飯ありがとう。またねと言い残し、制服のスカートを翻して、はなは玄関の外に消えた。

それに時計を見ると、午後10時。

もうまなさんも帰ってきている時間だった。

「何をだよ……!」

呆然と呟いた言葉に戻るものはなく、むなしさを煽るだけだった。

2008・12・07

## 2・乙女の憂鬱

「……これから塾か。嫌だなー」

私の吐いた大きなため息が、放課後の教室に無造作に落ちた。

それは、ただでさえ憂鬱な気分を、さらに降下させる。

カタツという音と共に背後に現れた気配に振り向くと、頼れる良き親友がかばん片手に立っていた。

「塾がイヤだなんて珍しい。何かあったの？」

「……きょーちゃんに相手にされない」

「……いつものことじゃない」

美穂ちゃんの苦笑しながらの一言に拗ねる。

確かにいつものことなのかもしれないけど、そこまではっきりと言われると私だって落ち込む。

相手にされないどころか、分類的に女の子だってことにもきょーちゃんは気づいていなさそうだ。

私を『女』扱いしてほしいのに、いつまでも子ども扱いばかりされている。

それが不満でたまらない。

「うーん、そうなんだけどねー。ここまで脈がないとやる気も失せてくるって言うか」

「誰か紹介しようか？」

「……まだいい。きょーちゃんを好きでいたい」

気がついたら、私の世界はきょーちゃん一色だった。

いつから好きだったか分からないくらい、ずっときょーちゃんだけ

を見てきた。

これからだつてそれは変わらない。  
今さら諦めて、他の誰かと付き合うなんて、これっぽっちも考えられなかった。

「はなも、恋する女の子なんだね」

「……………うん」

せめて、私がきょーちゃんのことを好きだつて気づいてもらいたくて。

きょーちゃんに女として扱って欲しくて、必死に背伸びをしているのだ。

私が大人だつて気づいたら、きょーちゃんも好きになってくれるかもしれない。

そんな淡い希望にすら賭けてみたくなる。

「なんか……………計算高くなった」

「……………どこが？」

にやりとしたり顔で笑う美穂ちゃんは、ひどく面白そうだ。

でも、『計算高い』といわれるようなことをした覚えがなくて、私は首を傾げた。

「今まで、家庭科で5以外取った事ないでしょ？」

「う……………きょーちゃんには内緒にしてね？」

実は、スパゲッティも洗い物も、果てはかつら剥きまで出来たりする。

最近はまり始めたのは飾り切りで、いつそ将来は板前でも目指したらどうだと家庭科の先生にも言われた。

きつと先生は、私が家で料理の出来ない振りをしているなんて思わないに違いない。

「……肉まん一つで許そう」

「ありがとう」

上目遣いで頼んだ私のお願いに、美穂ちゃんは大きいため息を吐いて許してくれた。

この小さいようで大きな嘘を隠してくれるなら、肉まん一つぐらい安いものだ。

「でも、家族にまで料理できるの隠してて大変じゃない？」

「だって、お母さんとおばさんって仲良いんだもん。すぐバレちゃうよ」

社宅で家が隣同士の石田家と葉山家の奥様同士は、子供の私たちがびっくりするほど仲が良い。

ぼやぼやとしていてドジばかりの私のお母さんと、あっけらかんとしたきよーちゃんのお母さん。

一見気が合わなさそうな二人だけど、放っておくと勝手に二人で旅行に行ってしまうくらいに気が合うらしい。

お互いにどんな話も包み隠さず話しているそうだから、一時も油断は出来ない。

どこからきよーちゃんの耳に入るか分からないからだ。

そうになったら、今まで積み上げてきた『放っておけない、ドジで可愛い幼馴染』の像が壊れてしまう。

それだけは避けたかったから、未だに私は包丁ひとつろくに使えない女の子を演じている。

いつどこで誰が聞いてるとも限らない話を切り上げたくて、私は美穂ちゃんに話を振った。

「美穂ちゃんは……今はこの前会ったあの人と？」

「えーっと、30歳の商社マン？ ずっと前に別れたよ」

「それって……最後まで20歳だって勘違いしたままだったんだ？」

「そうそう。ホントにアホなオッサンだった。別れて正解だよ」

あの日の美穂ちゃんは、お化粧を濃い目にしたとはいえ、全然若く見えた。

最後まで20歳だと騙されたままだったなんて相手の商社マンも不憫だ。

結婚すら出来ない小娘に本気になった上で捨てられるなんて可哀想だと思う。

でも、騙された方が悪いなんて考えてしまうのだから、私も大概性格が悪い。

背後から聞こえたゴツンという音に、体ごと振り向く。

そこには不機嫌そうな待ち人がいて、私はその理由を考えて首を傾げる。

さっきの物を置くときにするような重たい音は、どうやら鞆のようだった。

「また……たんまり貢がせた上で捨てたのか？」

「えー、そんなことないよ。ほんの少しだってえー」

心底嫌そうに質問した祥希くんは、媚びるように可愛い子ぶってみせる美穂ちゃん。

その目は『そんなの当たり前じゃない』と言外に告げていて、私もため息を吐かざるを得ない。

祥希くんもそんな気分になったのか、道端の害虫を見るような目で美穂ちゃんを睨む。

「……一回死んでこいよ、この売女」

「……ふふふ。そう言えば祥希って、この前女の子と腕組ん」

「あーあーあー。きこえないっ!」

くすりと楽しそうに美穂ちゃんが微笑んで言った内容に、祥希くんが大声を上げる。

その大音量に鼓膜が麻痺して、私は目を白黒させた。

「祥希くん、何かあったの?」

「うん、それがね……」

「すみません、俺が悪かったです。金輪際余計なことは言いませんので、今回だけは許してください」

「……ふうー。まあ、許してあげよう。肉まん4つで」

「多っ!?!」

私を蚊帳の外にして二人は落ち着く。

それを傍から聞きながら、時計を確認する。

5時30分。今から出れば、6時の講義に充分間に合う時間だ。

思い切り音を立てて椅子を引く。

それに気づいた二人が、急いで身支度をするのを横目で見ながら、教室のドアに向かった。

あとから二人が追いかけてくる足音がする。

それはやがて隣に並んで、私の服のすそを引いた。

「ねえ、はな。葉山先生と二人でご飯って危ないんじゃない?」

「え……どうして?」

「いや、だってあつちはオ・ト・コよ。オトコ！」

今までそんなことを一言も言わなかったのに、今さら何を言っているのか。

数えるのが面倒くさくなるほど、きよーちゃんと二人でご飯を食べている。

男を強調して言われても、何が危ないのかイマイチよく分からない。

「それがどうかしたの？」

「あーもうっ、なんて世間知らずなのかしらっ！」

訳が分からなくて首を傾げた私に、美穂ちゃんはじれったいのか地団太を踏んだ。

そんなことを言われても、何が世間知らずなのかが、やはり分からない。

「二人つきりになったら襲われちゃうかもしれないでしょ！ 危ない

いっいたらありやしない」

「……ありえないよ」

拳を掲げて力強く言われた言葉に、私は苦笑する。

二人つきりになったら襲われるなんて、私たちに限ってはありえない。

「だって、きよーちゃん。はなのこと、子供としか見てないもん」

「はな……」

「どれだけセクシーな格好できよーちゃんの部屋に行っても、相手になんかされてないし……」

「……」

胸元の開いた服でも、短いスカートでも、ショートパンツでもいつも反応は同じなのだ。

『あんまり冷やすと風邪引くぞ』の一言だけで、欲しい言葉はひとつもくれない。

どれだけ朴念仁なのだと憤っても、きつときよーちゃんには通じない。

そもそも私を女の子だと認識すらしていないのだ。

考えれば考えるほど、この恋は不毛だとしか思えない。

自分で言ったことが深く刺さって、じわじわと悲しくなる。

子ども扱いされていることに傷ついているなんて、本人は想像もしないに違いない。

突然、真横からガシツと肩を掴まれる。

その力の強さに驚くと、やけに真剣な顔をした祥希くんと目が合った。

「はな、それはやめておけ」

「……………どうして?」

「お前には似合わない」

祥希くんがそう言ったと同時に、その後頭部に鋭い一発が決まる。

それに目を見開く。

背後で叩いた手首をクルクルと回す美穂ちゃんは至って涼しい顔だ。

「なにしゃがんだっ! このアマっ!!」

「黙れ、クソガキ。はなに似合わないものなんてないに決まってるでしょ! あんたにはなの可愛さの何が分かるのよっ!」

「はあっ!? お前みたいな尻軽女より、俺の方がよっぽどはなの可愛さを知ってる!」

「何ですってっ……!？」

そのまま私の頭上で言い争いが始まる。  
学校の帰り道、制服を着た私たち三人に、通りすがりの人の視線が  
集まる。

それを恥ずかしいと思いつつも、私に二人を止める体力は残っていない。

「あー……うるさいなあ」

棒読みで発した言葉に余計生気を奪われる。

私じゃない誰かが、この喧嘩を止めてくれればいいのに。  
でも、止める人は現れないし、二人の争いは終わらない。  
それに疲れて、歩くスピードを上げる。

私の可愛さをどちらがより知っているかなんて言い争いするだけ無駄だ。

二人に分かってもらっても、何にも嬉しくなかった。

私の可愛さを分かってくれればいいのは、この世界でただ一人。  
でも、その当人は一向に分かってくれなくて。

これから講義で会うことを憂鬱に感じて、私はまたため息を吐いた。

2009・01・02

### 3・幼馴染略奪宣言

「先生、さよならー」

「おう、気をつけて帰れよー」

バタバタと廊下を駆けていく塾生たちに軽く手を振る。やっと終わったと肩を叩いて振り返ると、そこには数人の女子生徒がいた。

「先生つてこの後ヒマ？」

「ヒマだったらお茶しようよー!」

腕を両側からガシッと掴まれ、身動きを取れなくされる。彼女たちをそのままにして足早に講義室へ向かう。そんな俺に諦めずついてくる生徒たちに苦笑した。

「いや、暇じゃないんだなーこれが」

「もしかして、彼女つて奴？」

「えー先生。わたしたちのことは遊びだったんですか!」

「おい、待て」

冗談じゃ聞き流せないその言葉に俺は固まる。

仮にもここは職場の廊下で、彼女らはお客さま。

手なんて出すはずがないのに、遊びとは何だ。

彼女たちを傷つけないようにさりげなく拘束をはずし否定する。

「遊びも何も俺は塾生に手は出さないよ」

「先生つて嘘つきだー」

「嘘吐くところくな大人になれませんよー」

生徒たちの嘘つき呼ばわりに一人の知り合いを連想して、俺はいつそう苦笑いする。

そいつは自他とも認めるろくでもない大人で、正直自分でもなぜ友人などをやっているのかわからない。

自墮落で嘘つきで欲望に忠実。

彼女たちにそんな奴と一緒にされていると思うと鳥肌が立ちそうだ。嫌悪感を顔に出さないように、きわめてにこやかに俺は聞いた。

「俺がいつ嘘吐いたって？」

「えー。だって、先生って石田さんにはすっごく優しいじゃないですかあー」

「そうそう。石田さんが分からないところがあるといっつも授業止まるし」

一瞬、心臓が止まりそうになった。

はなをひいきしていないと言えは嘘になるが、それを誰かに察せられないように気をつけていたはずだ。

気づかれないよう細心の注意を払ってきた結果、他の講師にはまったく気づかれていない。

それを十年と少ししか生きていない中学生に察せられてしまうなんて不覚だった。

内心の動揺を押さえ込むため、ゆっくりと息をする。

視線を逸らさず、顔に笑みを貼り付けて、俺は口を開いた。

「まあ、それはだな……進度の遅い生徒に合わせるのが俺のスタンダードだよ」

「えー、じゃあそれって、全然授業進まないじゃないですか」  
「石田さんばっかりずるいつ！」

俺の言い訳に納得できないのか、あからさまに不機嫌になる生徒たち心底困った。

なんと言えば分かってくれるだろう。  
何を話せば仕方ないねといってくれるだろう。

この年代の子たちは上辺だけの取り繕った言葉にすぐ気づく。  
大人の都合で誤魔化した言葉に、どんどんと心を閉ざしていく。  
自分にも覚えがあるだけに、適当なことを言うつもりにはなれなかった。

返答に悩む俺を観察するような視線。俺は慎重に言葉を選ぶ。

「お前らは得意かもしれないけど、石田はな、英語が苦手なんだ」  
「わたし達だって得意ってわけじゃ……」  
「うん、知ってるよ。だからまだ基礎をやってる。皆おろそかにしがちだからな」

「先生……」  
「だから、石田だけが特別じゃない。まあ、たまに進度が遅くなったりするけどそれも許してやってくれないか」

はなをひいきしている。  
けれど、それはあくまで生徒としてだ。

英語の苦手な一生徒として彼女の進度に合わせているだけ。  
俺は講師として全員がちゃんと志望校に合格できるよう指導しているだけだった。

「分かったよ……」

「先生にそこまで言われちゃったら、許すしかないじゃん」  
「うん、ごめんなー」

多少機嫌が直ったのか、俺の言葉に生徒たちが苦笑する。  
それにホツとして、俺は生徒の肩にポンと手を置いた。

「大丈夫だ。遅れた分は冬期講習でみっちり叩き込んでやるからな」  
「先生、やっぱろくな大人じゃなーい！」

「ほら、話してる暇あつたらさっさと帰る」

「はあーい。先生、さよならー」

元気よく手を振ってパタパタと去っていく生徒の背中を見送る。  
今度こそ終わつたと思つて、ロッカーへ向かう。

慣れないことをしたせいの疲労感。  
酒か煙草が欲しいと思つた。

「おい」

「……ん？」

階段を上りながら今日の晩飯のメニューを考えていると、どこかから声がある。

こんな時間にまだ生徒が残っているはずもない。  
気のせいかと思つて、またロッカーを目指す。

「おい、先生！」

「あ……澤田か。どうした？ 何か相談か？」

背後から聞こえた大声に驚いて振り返ると、見下ろす先には俺の受

け持った授業の生徒がいた。

名前は澤田祥希。はなと中学が同じで同学年。

成績は中の上。前回の模試では上から数えたほうが早かった。

俺と彼には講師と生徒という以外、何の接点もないはずなのにどうかしたのだろうか。

「何が塾生に手は出さないよ、だ……。お前、立派に手え出してんじゃねえか！」

「澤田……？」

「はなだって塾生だってこと忘れてんじゃねえだろうな？」

話題に突然はなが出てきたことに目を見開く。

手を出すとか出さないとか、今日はどうしてこの手の話題ばかりなのか。

何かに呪われているとしか思えない。

澤田が何を勘違いしているのか知らないが、とりえず俺は弁解にまわる。

「何言ってるんだ、澤田？俺と石田は何でもないぞ？」

「嘘つき野郎。お前ら、幼馴染なんだろう？」

「あ……そうか。君ははなの……」

そういえば、中学に入って仲のいい男子が出来た話をまなさん経由で聞いたことがある。

今の今まですっかり忘れていたが、彼がそうなのだろう。

俺たちが幼馴染だと知っているのだから、これ以上教師然とする必要はない。

俺が肩の力を抜くと同時に、澤田が階段を上る。踊り場に立つ俺と同じところまで上ってきて、身長は俺の方が上だった。

それに気づいたのか舌打ちをする澤田に、俺は苦笑しながら言った。

「それにしたつて、俺たちに幼馴染以上の関係はないぞ?」

「……それなら、誰がはなの彼氏になつても、お前には関係ないよな」

「は……?」

予想していなかったその言葉に、俺は固まる。

意図が分からなかったことが伝わったのだろう、澤田が苛立った様子で続ける。

「俺がはなの彼氏になつても、邪魔すんなつてんだよ」

「……はなのことが好きなのか?」

「ああ、好きだ。彼女にしたいと思ってる」

その言葉は、少しだけ衝撃的だった。

俺が中学生だった頃は、恋なんてものに現を抜かすことなく受験勉強にまっしぐらだった。

彼女を作るなんて夢のまた夢で、彼女のいる先輩たちを見てはうらやましく思ったものだ。

それに、はなを好きという男が現れるなんて思っても見なかった。

なんたつて俺は、はなが生まれた当初から知っているのだ。

乳離れもハイハイしてたころも七五三だつて知っている。

まだ子供だと思っていたのだ。

まだ恋も知らない子供だと思いついていたのだ。

もしかしたら。もしかしたら、はなも誰か好きな男がいるんじゃないか。

今、やっと思い至る。

「だから、手出すなよ。あいつは俺んだからな」

「……」

言い捨てられたそれに、俺は返す言葉を持たない。  
今は何も考えたくなかった。

2011・01・23

#### 4・強がり猫かぶり

「ねえ、石田さん。ちょっといい？」

「……何？ これから用事があるんだけど」

最後の講義が終わって帰り支度をしていた私に話しかけてくる女の子二人組。

その声を聞いた瞬間、これからの話が予測できて、私は真面目に話すのも億劫になった。

「すぐ済むよ。ほら」

「……」

「秋津さん？ 何の用？」

化粧の濃い井上さんの後ろで、もじもじとしている秋津さんに私は極力優しく話しかけた。

本当は今すぐ帰りたいけど、これも仕方ないことと諦めている自分が少し嫌だった。

「……やっぱり言えないよ」

「……人待たせてるから早くしてもらえないかな？」

「いいよ、代わりに言うから」

ちらちらと私の様子を伺いながら中々話をきりださない秋津さんに、

少し苛々する。

早く彼女たちから解放されたかったから、嘘をつく。

美穂ちゃんは今日はお家の都合で講義をサボっている。

きよーちゃんはこれから模試の採点だろう。

私を待っている人なんていなかった。

何も言えない秋津さんの代わりに井上さんが私と向かい合う。

その表情の真剣さに私は意地悪く笑いたくなった。

「ねえ、石田さんって、葉山先生のこと好きでしょ？」

「……だったら何だって言うの？」

思ったとおりの話題に私の語気が強くなる。

私の態度に驚いたのか、少し目を見張った井上さんは、不快そうに続ける。

「この子もね、葉山先生のが好きなの。だから、諦めてくれな  
い？」

「……」

「葉山先生と石田さんじゃ釣り合わない。不相应よ」

言いたいことを言っつきりしたのか、井上さんと秋津さんが満足そうに顔を合わす。

それを見ながら、私は大きいため息をついた。

さつき井上さんが驚いたのは、私があんな挑発的な態度をとるとは思わなかったからだろう。

私は自分で言うのもなんだけど、塾や学校、外という外で猫を被っている。

おとなしくて反論なんてできなさそうなキャラだと思われがちだけど、実際は違う。

正反対だ。

私の大きなため息に秋津さんは怯えたような表情を作る。

それにひどくカチンときた。

「馬鹿らしい」

「は？」

「馬鹿らしいって言ったの。私がいなくなっただってライバルなんて塾の中だけでも沢山いるじゃない」

実を言うと同じようなことを私に言いに来たのは彼女たちで三組目だ。

必ず複数人で、言うときに障害になるであろう美穂ちゃんがない日を狙って文句を言いにくる。

その内容も代わり映えしなくて、私はもう嫌気がさしていた。

「どうしてあなたたちにそんなこと強制されなきゃいけないの？」

「そっそれは」

「諦めるも諦めないも私の自由、私が決める」

私が反論したのが珍しいのか、混乱した様子の二人にきっぱりと告げる。

誰かに命令されたくらいで諦められる恋心だったら、何年も片思いしたりしない。

告白してきた誰かと適当に付き合うことだっていくらでもできた。でも、きよーちゃんがよかった。きよーちゃんじゃなきゃ駄目だった。

諦めることなんてできない。

井上さんの後ろでおろおろするだけで何も言わない秋津さん。

彼女にきよーちゃんを好きな気持ちが悪くても思えなかった。

「それに秋津さん、あなたどうして自分で言わないの？ 汚れ役は人に押し付けるの？」

「……そんな言い方」

「だって、そうじゃない。そんなんだから先生に相手にされないのよ」

「っ……！？」

私が思わずキツイことを言うと、秋津さんの瞳に涙がたまる。その様子に苛々が増す。

泣けば許されると、誰かが助けしてくれると思っ  
ているのだろうか。そうだとしたら  
同じ年とは思えないほど幼い。

私に色々言われなくなったら、牽制  
なんてしにこなければよかったのに。

反論されてそれが凶星だったから  
泣くなんて卑怯だ。

「ああんた今まで猫かぶってたのね！」

「猫かぶってない。あなたたちが  
知らなかっただけ」

「……それにしたってひどい。そんな  
こと言わなくてもいいじゃない」

秋津さんが泣いたことで激昂する井上  
さんに、私はあくまで冷静に告げる。

井上さんにすがってぼろぼろと涙をこぼす  
秋津さんに嫌悪感すら沸く。

恋は弱肉強食。

泣くひまがあったら、きよーちゃんに告白の  
ひとつでもすればいい。

けれど、告白する気がない私も人のこと  
は言えなかった。もしかしたら、これは八つ  
当たりかもしれない。

「だって事実じゃない。私に文句言う前に  
やることがあるでしょ？」

「じつこの！」

井上さんが振り上げた手が目前に迫る。

殴りたいなら殴ればいい。

どう考えたって、間違っているのは秋津さんなんだから。

「そこまで。……はな言いすぎだ」

「……祥希くん」

井上さんのビンタを寸前で止めた祥希くんが、私を見て首を横にふる。

もう何も言わないでいいと言わんばかりのそれに、私は知らず知らずの内に入っていた肩の力を抜く。

ひどいことを言われたのは彼女だけじゃないのだ。

「お前らも暴力はよくない」

「……だって、石田さんが！」

「それでも暴力はよくないだろ？」

井上さんの手を下ろし、諭すように話す祥希くんが秋津さんが反論する。

比較的女子に優しい祥希くんがきたことで、味方が増えると思ったのだろう。

祥希くんが反論したことで、秋津さんは悔しそうにうつむく。

「行こっ……」  
「うん」

秋津さんを促して、井上さんたちはそのまま講義室から去る。部屋に残っているのは私と祥希くんだけだった。

「はな」

「……私、間違ってない。間違ってないよ」  
「うん、分かってる」

言いたいことは全部言った。  
私は間違ったことなんて言ってない。  
やりこめてやったはずなのに、悔しさだけが残る。

不釣合いなんで誰かに言われるまでもない。  
きよーちゃんは大人。私は子供。  
釣り合はずもない。

何ともいえない気持ちをもてあまして、強くこぶしを握る。  
少し伸ばした爪がてのひらに食い込む。

「不釣合いなんで……言われなくても」  
「はな」

「悔しかったから、思わず言い過ぎちゃった。とめてくれてありがとう」

心配そうに私の名前を呼ぶ祥希くんが何かを言う前に口早にお礼をする。

今は下手な慰めなんかいらない。

私のことは放っておいてほしい。

私の頑なな態度に、祥希くんは言葉を飲み込んだ。

視線をそらし、多分さつき言いたかったこととは違うことを口にする。

「泣いていいぞ」

「……泣かないよ」

いつか、きよーちゃんに振られる日が来るかもしれない。

その日まで涙はとっておく。

そう続けると、祥希くんはそうかと微笑みと哀れみの中間みたいな顔で笑った。

## 5・別れた理由

「いらつしゃーい、はなちゃん」

「あなた……誰？」

玄関のチャームを押し出てきた男の人を見て固まる。

ここはきょーちゃんの家だったはずなのに、なんで知らない人が出てくるのか。

幼馴染の私に教えないで、きょーちゃんは引越してもしてしまったのか。

そうだとしたらひどい。

「おいつ、雅人っ！」

「あ、きょーちゃん」

妙に綺麗な男の人の後ろからきょーちゃんが顔を出す。

知らぬ間に引越してたり、部屋を間違えたわけじゃないらしい。いつもと変わらない姿を見せるきょーちゃんにホッと息をつく。

「はな、連絡なしにくるのはやめろって言ってるだろ？」

「……ごめんなさい」

男の人をちらりとみて、きょーちゃんは機嫌悪くため息をついた。それに怯えながら、私は素直に謝る。

きょーちゃんがこんなあからさまに不機嫌なのは珍しい。もしかしたら、何か癩に障ることをしたのかもしれない。原因が分からないまま、嫌われたらどうしよう。

あわあわと対応に困っている私に、きょーちゃんは面倒くさそうに口を開いた。

「ちょっと立て込んでるんだ、だから今日は……」

「何言ってるのさ、さっきまで二人でUNOしてただろ」

「余計なこと言うなよ」

「ほら、そこにいたら寒いし、はなちゃんも入って入って」

私を追い返そうとしたきょーちゃんをさえぎって、男の人は私の手を引いた。

それになす術なく、彼に従いきょーちゃんの部屋に入る。

カチリという鍵のしまる音がやけに耳に響く。

「僕は成田雅人。京大の親友だよ」

「……はじめまして、はなです」

「うん、京大から話は聞いてるよ。かわいいね、はなちゃん」

「え……」

顔立ちの整った大人っぽい男の人の言ったことに私はまた固まる。

きよーちゃんの友達に会ったことは何度かあるが、今までにいなかったタイプだ。  
少なくとも昔会った人たちには、可愛いなんて言われなかった。  
軟派な人は初めてだった。

私たちの会話を聞いていたのか、きよーちゃんが成田さんの肩をがしりと掴んだ。

「おい、中学生を口説くなよ」

「そこに女の子がいたら口説くのが僕の使命だよ、京大」

「はなに近づくな、変態がうつる」

女たらしの鏡のような言葉を紡ぐ成田さんから私の手をきよーちゃんにさらう。

図らずも手をつなぐことになってしまって、嬉しいやら恥ずかしいやら、どんな表情をすればいいか迷う。  
少し頬が熱くなってきたかもしれない。

「はな、お茶でいいか？」

「え、あ、……あれ、私帰らなくてもいいの？」

「……もういい」

居間のこたつで私の手を放し、きよーちゃんは台所に立った。

やかん片手に振り返るきよーちゃんに我に返る。

複雑そうな表情で流しに向き合ったきよーちゃんを横目に、成田さ

んはUNOの散らばることたつにドカツと腰を下ろした。

「僕と会わせたくなかったただけだよ、京大」

「お前は少し黙ってる」

「僕みたいな男に会わせたら食べられちゃうとも思ってたんでしょ」

彼に倣って、私もコートを脱いでこたつに入る。

誰かに冷たいきょーちゃんを初めて見る。

きょーちゃんは基本誰とでも仲良く、波風立てずに生きているように見えるから、とても新鮮だった。

「あいにく僕は中学生には手を出さないよ。高校生からが精一杯さ」

「……来年からはなは高校生なんだが」

「うん、だから楽しみだね、京大」

やかんのお湯の沸いたピーツと言う音が響く。

ガチャガチャという音のあとに、お盆を持ってきょーちゃんが私の右隣に座る。

ときばきと湯飲みを並べ、緑茶を回しいれていく。

最後の一滴まで注ぎ終わったきょーちゃんは、急須を置いて成田さんを見据えた。

「お前にはやらんぞ」

「え……」

湯飲みには伸ばしてた手をとめ、私は今日三度目の思考停止。  
パチパチと瞬きを繰り返して意味を理解し、頬がカツとなった。

きよーちゃんは、もしかして私のことを女の子としてみてくれているのかも。

誰かにとられてはたまらないと想ってくれているのかもしれない。  
期待に胸がふくらむ。

緑茶に口をつけ、成田さんは怪訝そうな顔をした。

「何さ京大、散々否定してたクセに君たちつきあってるの？」

「……そんなわけないだろ」

成田さんの言葉をきよーちゃんは呆れた表情で否定する。

きよーちゃんの変化を見ていたくなって、私は目を伏せる。

手に取った湯飲みの底に茶柱が立っているのをひどく滑稽に思う。

「俺たちは幼馴染だし、年だって離れてる。普通に考えて付き合ってるわけないだろ」

「……」

きよーちゃんの口から出た、隙のない全否定。

私がどれだけきょーちゃんを想っても、報われないのを目の当たりにされる。

少しくらい焦ってほしかったのに冷静に否定して、一分も夢を見させてくれない。

茶化して冗談にしてくれたほうがまだマシだ。

私のことなんて眼中にないんだって自分で言うのはいい。けれど、本人に言われるのはひどく堪えた。

「京大ってモテないわけだよな」

「は？」

成田さんはこれは駄目だといわんばかりにため息をつく。

そのあと、ちらりと私を見た。

もしかしなくても、彼には私の気持ちはお見通しなのだろう。

知らぬは当人ばかりだ。

何かを思いついたのかぼんと手を叩き、成田さんは私をみてニヤリと笑う。

その笑顔はとても不吉で、嫌な予感しかしない。

「はなちゃんは京大がモテなかったこと知ってる？」

「えっと、知らないですけど？」

「京大ってね、大学のときに告ってきた子をこっぴどい振り方して

から女の子から嫌われてね」

「雅人っ、その話はっ!!」

脈絡のないその話を戸惑いながら聞いていると、きよーちゃんが焦ったように成田さんの肩をつかむ。

それにかまわず成田さんは至極楽しそうに話を続けた。

「何て言っつてフツたと思うっ？」

「雅人っ!!」

「幼馴染の面倒を見なきゃいけないから他の女に構ってられない、  
っつて言っただって」

成田さんの予想外の言葉に湯飲みを持つ手から力が抜ける。

こぼれる寸前、我に返って持ち直す。

左右にゆれる水面はまるで私の心のようだった。

「ったく、余計なこと言いやがって……はな？」

「……私のせい？」

固まった私の様子に気づいたのか、きよーちゃんは心配そうな顔で私を見た。

その顔が昔からずっと変わっていないくて、私の視界がにじむ。

もう泣くのを我慢できない。

「私の子守頼まれてたせいできょーちゃん恋人の一人も作れなかったの？」

「……はな」

「私、なんて謝ればいいのか」

きょーちゃんの時間をそんな風に奪っていたなんて知らなかった。好きでやっているものと思っていたから、知らずともしなかった。

最初は仕方なくだったかもしれないけど、途中からは好きで私の面倒を見ていたんだと思っていたのに。勘違いだったなんて。

私の存在はきょーちゃんにとって迷惑で邪魔にしかないなんてショックだった。

湯飲みを置いて、てのひらで顔を覆う。ポロポロと涙が出て止まらなかった。

「雅人」

「はい、何でしょー？」

「お前ちよつとコンビニ行ってこい」

「……どうぞ」ゆっくりー」

成田さんの気配が玄関の方向へ去っていく。

扉の閉まるボタンという音のあとには、私のすすり泣く声だけが残る。

きよーちゃんが私に向き合う気配がしたけど、私は顔を上げる気にはなれなかった。

「はな」

「……」

「こっち向け、はな」

優しい声音で私を呼ぶきよーちゃん。

私の大好きな人。

そんな人の大事な時間を奪うことしかできない私には、きよーちゃんを好きでいる資格すらないのかもしれない。

でも、私はどれだけ不相応だと身勝手だと言われても、きよーちゃんを諦めることはできなかった。

私は、きよーちゃんじゃなきゃ駄目なのだ。私にはきよーちゃんしかいないのだ。

嫌わないでほしい。邪魔だと思わないで。

お願いだから一緒にいてほしいの。

頭に乗せられた手に顔を覆ってた手をはなして、私は顔を上げた。相当不細工な顔をしているのか、私の顔をみてきよーちゃんが苦笑する。

「泣くことないだろ……」

「だって、私がきょーちゃんの青春を、んっ!？」

なおも言及しようとする私の口をきょーちゃんは手でふさぐ。

突然のことに混乱する私にきょーちゃんは困った顔をする。

「あいつ、いつも肝心なところを言わないで話をややこしくするんだよ」

「え……?」

「さっき雅人がした話は続きがあるんだ」

私の口から手をはなして、きょーちゃんは頭を撫でた。

その優しい手つきは私をひどく安心させる。

「俺に告ってきたその子はそれでも俺と付き合いたって言ったんだ。だから、俺たちは付き合うことになって」

「うん……でも、別れちゃったの?」

いまきょーちゃんに彼女がいるって話は聞いたことない。

きょーちゃんに彼女が出来たら、私達の両親経由で話が筒抜けになるはずだ。

前日も前々回もそうだった。

その度にきょーちゃんがその彼女と結婚でもしてしまったらと不安

になった。

彼女ならどうにかなると思うけど、奥さんができたら私ももう諦めざるを得ない。

「あーうん、今思えばすげーくだらない理由で喧嘩して」

「……教えてくれないの？」

「……これだけは教えたくなかったんだけど」

話を濁したいのか目をそらすきょーちゃんに私は唇を尖らせる。  
また泣かれてはたまらないのだろう、きょーちゃんは大きなため息のあと、恥ずかしそうに言った。

「写真がみつかったんだよ」

「写真？」

きょーちゃんの言葉に私は首を傾げる。

写真が原因で喧嘩して別れるってどういうことだろう。

心底分らない様子の私にきょーちゃんは観念したのか、立ち上がり無造作においてある鞆の中から財布を取り出した。  
そこから一枚の紙を抜き取り、私に渡す。

「ほら」

「……これって、私？」

「お前の小さいときの写真」

そこには、私ときよーちゃんが写っている。背後に小学校がうつつているということは、これはもしかしたら入学式の写真かもしれない。なんで両親じゃなくてきよーちゃんと写っているのかが分からないけど、私が6歳ってことは、きよーちゃんは18歳。

きよーちゃんと写るのが嬉しいのか、私は満面の笑みできよーちゃんの手を握って。それが恥ずかしいのか、目をそらすきよーちゃんに、私の頬がゆるむ。高校生のきよーちゃんなんてもう覚えていないから、写真を見れてとても嬉しい。

食い入るように見つめてる私に照れたのか、きよーちゃんは私の持っていた写真を没収する。

「あ、ひどい」

「また今度な。……これが見つかって振られた。ついでに大学中にロリコンだって噂が立った。これが真相」

「ごっごめんなさっ」

「なんでお前が謝る？」

私のせいでそんな不名誉な噂を立てられたなんていたたまれない。そもそもきよーちゃんがロリコンだったら、私はこんなに苦労しない。

もつと気楽に好きでいられたかもしれない。

脈がなくて、きょーちゃんの言動にいちいち一喜一憂しなくてすんだかもしれない。

けど、現実はそのうまくいなくて、きょーちゃんは私の気持ちに気づきもしない。

不毛だ。不毛すぎるけど負けない。

いつかきょーちゃんとラブラブになるのが私の夢なのだ。

財布の中に写真を戻し、きょーちゃんはそれを大事そうに鞆に入れる。

その動作に、私ははからずもキュンとしてしまう。

「お前は謝らなくていいよ、俺が写真入れてたのがいけなかったんだし」

「……………どうして?」

「ん?」

再度頭を撫でる手にドキマギしながら、きょーちゃんに聞いた。

もしかしたら、何か意味があって写真を入れていたのかもしれない。きょーちゃんの答えが、私にとって都合のいいものであることを期待する。

そんなものはさっき木っ端微塵に砕かれたばかりなのに、我ながら懲りない。

けれど、恋する乙女としてはどんな些細な可能性にだってかけてみたかった。

「どうして私の写真なんて」

「……どうしてだろうな」

私の質問にきよーちゃんは曖昧に笑う。

そのどっちつかずの態度に、私は続きを聞くことができなかった。

2011・04・11

## 6・焼餅不機嫌娘

「58点」

「……」

塾が終わって帰ってきた自室で俺はため息をつく。

目の前には同じく塾帰りのはな。

こたつの上に並んだ答案用紙を親の敵のごとく睨んでいた。

どれも点数がイマイチなそれは、このまえやった合格判定模試。

50点以下はないものの、受験をすぐに控えた中学生の取る点じゃない。

特に俺の教える英語の点数は群を抜いて悪かった。

「俺の言いたいことは分かるよな？」

「……もっと勉強しろって言いたいんでしょ？」

説教をされているからか、はなの機嫌は悪い。

口角を下げ拗ねている様子を見て、拗ねて投げ出してしまいたいの  
は俺のほうだと思った。

「はな、受験まであとふた月しかないんだ、自覚あるのか？」

「……言われなくても」

「なら、この点じゃ無理だって分かるだろ？」

はなの志望する私立成城高校は、いまのはなのレベルでは届かない。  
全ての教科をせめて10点、英語は15点以上上げないと合格でき  
ないだろう。

いまの点数のままなら、担当講師としては受験することも考えなお

してほしいくらいだ。

俺の指摘にますますへそを曲げたのか、はなは下を向いたままさらに口を尖らせた。

さつきから俺のことなど少しも見ない。

「……きよーちゃんの教え方が悪いんだよ」

「お前な……」

「最近、なんかきよーちゃん冷たいし」

湯飲みを抱え目をそらしはなはぼやく。

その内容の幼稚さに俺は内心またため息をついた。

「だから、勉強しないで拗ねてんのか？」

「……そういうわけじゃないもん」

「じゃあどうして勉強しない？」

「……私が勉強しようとして勉強しなかりょうときよーちゃんには関係ないでしょ！」

俺の質問に、はなの語気が荒くなる。

はなはそう言うが、俺は仮にもはなを教える立場だ。関係ないわけがない。

でも、それを言ったらはなはますます怒るだろう。

扱いにくいことこの上ない。正直言つと少し面倒だ。

けれど、そんなことは言つてられない。

まなさん直々に、はなの勉強を見てくれと頼まれているのだ。

昔からまなさんにはお世話になっている。

途中放棄するわけにはいかなかった。

「まなさんが心配してんだよ。お前が全然勉強しないって」

「……きよーちゃんはいつもそうだよね」

「何がだ？」

はなはスプーンを手に取り、お茶請けにだした信玄餅のきなこをぐちゃぐちゃと混ぜる。

俺がまなさんの名前を出したことが気に障ったらしい。

その手付きはひどく乱暴だ。

「きよーちゃんが心配してるわけじゃないよね、お母さんが心配してるから私に構うんでしょ？」

「そういうわけじゃ……」

「塾が終わったあとのこれもそう、お母さんに言われたからはじめてたんでしょ？」

儼然とした表情のはなに思い至る。

はながへそを曲げている原因は、最近はじめた課外授業のことだったらしい。

まなさんに頼まれたそれは、塾の終わった夜に俺の部屋で始まる。

ワンツーマンで数時間勉強したあと、報酬であるまなさんの手料理をいただくのだ。

料理が下手なまなさんだが味はまずまずで、食費が浮くのもあって俺としては助かっている。

はなはそれが気に食わないのだろうが、頼まれた以上、はなの成績をあげるのは俺の使命だ。

そのためにはこの不機嫌娘をどうにかしなければいけない。

いつまでもへそを曲げていてもらっては困るのだ。

俺ははなの機嫌を直してもらったため、できるだけ優しい笑顔を作った。

「きっかけはそうだったかもしれないけど、いまはお前のことを心配して」

「……嘘。信用できない」

「はな……」

「お母さんには私から話す。もうきょーちゃんからは習わないよ」

女の勘ってやつだろうか、俺の嘘を簡単に見破るはなに内心舌を巻く。

機嫌を直してもらったどころか、いまは下手な嘘を言つと逆効果のようだった。

黒蜜をたらし、串で餅を刺し、はなはそれを頬張った。

それを見て、妙に甘いものが食べたくなる。

はなの態度にイライラしているからかもしれない。

俺も目の前あつた信玄餅の包みを開けた。

「やだ。もうきょーちゃんには習わない。祥希くんに教えてもらうもん」

「……あいつだつて受験生だろ」

「でも、きつときょーちゃんよりずっと親身に優しく教えてくれるよ」

「ああ、そうかよ」

はなの物言いにカチンときた。

俺も親身に優しく教えてるつもりだったのに、はなはそうは思わな

かったようだ。

しかもよりもよって、はなに好意を寄せる澤田に教えてもらうときた。

はなはあいつがはなのことを好きだと知らないのかもしれないが、それにしても警戒心というものがない。

いつ他の男につけこまれるかもしれないと思うと、腹が立った。

「なら澤田に習えばいいだろ」

「……きよーちゃんの朴念仁」

「……俺がいつ分からず屋だったよ」

俺の吐き捨てた言葉に、はなは恨めしそうな顔で餅を食べる手を止めた。

落ち込んだその様子を無視して俺は糖分を摂取する。

気分屋ではすまない、はなの浮き沈みにいちいち付き合っていたらこっちが消耗してしまう。

意図的にシカトする俺に気づいたのか、はなはまた唇を尖らせた。

「……きよーちゃんの馬鹿」

「……はあー。お前はガキか」

俺が呆れて言うと、はなが思い切りこたつを叩いた。

こたつの上の湯のみが左右に揺れ、その中身をこぼす。

「はな、子供なんかじゃないもん！」

「……へえ、どこが？」

ガキという言葉がはなの琴線に触れたらしい。

はなを傷つけたかもしれないが、俺には撤回するつもりはなかった。

俺の持つあの写真の頃に比べたら、少しは大人になったかもしれない。

けれど、癩癩をおこして、物に当たるようじゃまだ子供だった。

「いつまで私のこと子ども扱いするの！」

「……そうやって駄々こねるところが子供だって言ってるんだ」

「っ……！」

俺の指摘に思い当たるところがあったのだろう、はなは悔しそうな顔をした。

そして、黙ったまま、湯飲みに手を伸ばした。

怒鳴ったから喉が渴いたのかもしれない。

はなの動作につられて、俺も煎茶を飲んだ。

きなこまみれで気持ち悪かった口内がさっぱりすると、少しイライラも収まる。

「きょーちゃんなんて嫌い」

「……はいはい」

茶を飲んで落ち着いたからか、はなの言葉を受け流すことも余裕だった。

とりあえずいまは喧嘩をしている場合じゃない。

一分一秒でも長く勉強するべきだ。

言い争いしている時間も無駄にはできない。

「ほら、休憩は終わりだ。間違えたところやりなおすぞ」

「……きょーちゃんのそういうところが嫌い」

いまの会話からどうして嫌いなんて言われなければいけないのか。はなの真意が分からなかった。

幼馴染で、生まれてからずっと見ていたはずなのに、最近は何を考えているのか分からない。

15年間一緒にいて、こんなことは初めてだ。

澤田に牽制されたときにも思ったが、はなに關して俺は知らないことが多すぎるんじゃないだろうか。

はなのことは俺が一番知っているとと思ってたけれど、それはもしかしたら違うのかもしれない。

現にいま、いくら考えてもはなに嫌いと言われる理由が分からない。少なくともはなは、幼馴染として俺のことを好いているはずだ。

好いていなければおかしいくらい、俺に懐いていると思っている。けれど、それはポーズで本当は俺のことは嫌いなのかもしれない。

はなにいわれた一言で不安が広がる。

嫌われていないと断言できない自分が嫌だった。

「いつつもいつつもどうして私の話を最後まで聞いてくれないの？」

「……はな」

「私は、私は……きよーちゃんのことを好きだよ」

はなはそう言って泣き出す。

その口から出た言葉に俺は安堵する。

嫌われているかもしれないと不安になったが違うのならよかった。さっきの言葉のあやだったのだ。

こたつから身を乗り出して、涙するはなの目元をぬぐう。

顔を上げ期待を目に浮かべるはなに、俺はなるべく優しく微笑んだ。

「……嫌いなんて嘘。きよーちゃんのが好きなの……」  
「俺もはなのことが好きだよ」

「……っ、そういう意味じゃないって知ってるでしょー!」

はなの表情に答えを間違ったことを知る。

こういう返答を期待していたんじゃないのか。  
ますますはなが分からない。

泣きながら眉を歪めたはなは、俺の胸元に手を伸ばした。

シャツを掴まれ勢いよく引っ張られる。

予測できなかったそれに俺はされるがまま。

唇にあたる衝撃。やわらかいもの。

その正体に思い至ってすぐ、俺ははなを突き飛ばした。

「お前……」

「……こういう意味で好きなの」

突き飛ばされたはなは、崩れた体勢からすぐに俺に向き直る。  
潤んだ瞳に俺は初めてはなを怖いと思った。

「私はきよーちゃんを男の人として好きなんだよ」

「はな……」

もしかしたら、はなも恋をして、彼氏を紹介してくるんじゃないかと。  
と。

はなも誰か好きな男がいるんじゃないかと思っていた。

けれど、それが自分だなんて予想してなかった。

はなからしたら俺はオッサンで、恋愛対象外であると思っ込んでい

ただ。

俺はどうして気がつかなかったのだろう。考えてみれば兆候はいくらでもあった。

俺に彼女が出来るかと不機嫌になったり、突然泣いたり。それは好きのサインだったんじゃないのか。

鈍感すぎる自分に少し絶望する。

俺を見るはなの真摯な表情に、どう返答していいか迷った。

「きよーちゃん」

「……はなのそれは本当に恋なのか？」

「え……？」

俺を本当に男として好いているのだろうか。

ただ単にひな鳥の刷り込みのように、俺が一番近くにいたから好きだと思ったんじゃないだろうか。

疑う俺の視線にはなはまた泣きそうに見えた。

「憧れとかを恋だと勘違いしてるんじゃないのか？」

「……私だってそこまで子供じゃないよ。真剣にきよーちゃんのことが好きなのにつ！」

「お、おいっ！」

立ち上がりはなはまた俺の胸元に手をかけた。

さつきみために引っ張られてはたまらない。

はなの手を掴むと、強く握りすぎたのだろう、はなは顔をしかめる。

けれどもはなの力は弱まらず、今度は俺の胸に体重をかけて押した。

予測していた方向と反対側に力が加わったことで、俺はまたされる

がままに倒れる。

馬乗りになったはなに唇を奪われる。

合わせるだけの拙い仕草に俺の理性の紐が切れた。

軽いはなの身体を持ち上げ、くるりと体勢を変え、はなの唇を自分のそれで優しく挟み込む。

受身だった俺が突然動いたことに動揺したのか、唇を離そうとするはなの頭に手を伸ばしキスを深くした。

唇の隙間から舌をいれるが、はなが歯を食いしばっていてそれ以上は進めなかった。

あくまで抵抗するはなに、歯茎を丁寧になぞる。

それに震えるはなの初々しい仕草に、俺は口内で笑った。

緩んだ歯列の間から侵入し、逃げ惑う舌を絡め、上あごをなぞる。時折鼻から抜ける声に俺は喜びを抑えきれない。

好き放題に蹂躪し気が済んだ頃には、はなは少しも抵抗しなくなっ  
た。

見下ろすはなは目の端からポロポロと涙をこぼす。

「はな……」

「……ひどい」

唇を離すとはなは放心状態でポツリと言った。

その言葉の意味がわからず首を傾げる俺に、さめざめと泣き続ける。

「きょーちゃんは私のこと好きじゃないでしょ？」

「……そんなことない」

はなの質問に俺はどちらとも言えない答えを返す。

好きか嫌いかで言うなら好きだろう。  
けれど、女として好きかときかれると困る。今までそういう目で見てこなかったのだ。

突然女として見るといわれても戸惑いしか感じない。

俺の中で定まっていない気持ちを、正直に伝えていいのだろうか。

顔を覆うはなの喉から嗚咽が漏れる。

さつきとは違うはなの泣き方に俺はオロオロしながらはなの上から退いた。

最近、俺ははなを泣かせてばかりだ。

「はな、ごめん。そんなに嫌だったか？」

「……謝るくらいなら最初からしないで」

「そうだな、ごめん」

身体を起こし乱れていた衣服を整え、はなは涙をぬぐう。

泣きすぎたからか目の腫れているはなにティッシュケースを差し出すと、受け取りそれで手と唇を拭いた。

そのはなの行動に少し傷つく。

「きょーちゃんはずるいよ。いつも肝心なことは言ってくれない」

「……」

「私のこと好きじゃないのに、大人のキスなんかしないでよ！」

答えられない俺に、言葉と共にティッシュケースが飛んでくる。

避けられずにモロに顔面に食らう俺を無視して、はなは立ち上がりコートと鞆を手にとった。

ちらりと見た横顔には、新たな涙の軌跡があった。

「きよーちゃんの馬鹿！ 大っ嫌い！！」  
「おいっ、はなっ！」

慌しくはなの出て行ったドアがボタンと大きな音を立てて閉まる。  
はなの最後の捨て台詞とぶつかったところが痛む顔に、俺はしばらく身動きができなかった。

2011・04・22

## 7・嘘でも言えない

「はな」

「あ……祥希くん」

放課後の教室で参考書とにらめっこしていると待ち人が来た。開きっぱなしの携帯と隠し持っていたお菓子を鞆に仕舞う。

「待ったか？」

「ううん」

隣の机を横にずらして、私の机とつなげる。

重そうな荷物を机の脇に置いて、祥希くんはどさりと椅子に座る。

「松山は？」

「今日は帰っちゃった。なんか忙しいみたい」

今、私は祥希くんと美穂ちゃんの二人に英語を習っている。

放課後、ほぼ毎日、都合のつくどちらかに、下校のチャイムが鳴るまでの約束だ。

二人だつて受験生なのに、私のお願いを快く聞いてくれて、申し訳ないと共にとても感謝してる。

鞆の中から筆箱を出し、祥希くんは赤ペンを握る。

それに、昨日出された宿題を渡した。

「つき合わせちゃってごめんね？」

「……いいよ。はなより出来るし」

「う……数学ははなの方が出来るもん」

軽快に丸をつけていく祥希くんの手元をちらちらとうかがう。見たところ丸が多いけど、単語のスペルミスが目立つ。それに長文はほとんどを落としているようだった。

「はなは語学系が駄目だからなー」

「そついう祥希くんこそ理数系弱いくせに」

からかう祥希くんに、私は憎まれ口を叩く。

悔し紛れに発した言葉に、祥希くんは私の頭を小突いた。

「無駄話してると、教えないぞ」

「……はい」

返ってきた答えは、大体が丸だったけど、小さなミスが目立つ。長文問題のほとんどが些細な間違いだった。本番では、その些細なミスが命取りになる。何度も言われたことだった。

かえってきた宿題の出来に、私が打ちのめされていると、それを見て、祥希くんは躊躇いながら口を開く。

「……もう葉山の講義にはでないのか？」

「……うん」

少し迷ったけど、私は正直に答える。

成城には合格したい。

でも、きょーちゃんの講義にはどうしても出たくなかった。講義に出たほうが自分のためにはなるだろう。

思うように上がらない点数に焦れているのも確か。

けれど、あの日あんなことをしたきょーちゃんに習うのには抵抗がある。

好きな気持ちに変わりはない。だけど、今は会いたくない。会ってもどんな顔をしていいかわからない。

こんな状態では、目すら合わせられないだろう。

「何か、あったのか？」

「……うん、ちよつとね」

心配そうな顔をした祥希くんには私は曖昧に笑う。

間違えたところを直す私の手元、祥希くんの影が伸びる。

「俺には相談できないか？」

「そんなこと、ないよ。でも、人に相談するには少し恥ずかしくて」

「どんなことでもいいよ、ちゃんと聞く」

「……ありがとう」

直していたペンを止め、祥希くんの優しさにどうしたらいいか迷った。

祥希くんはそれなりに仲のいいお友達だけど異性だ。

美穂ちゃんと恋バナをするように、祥希くんに相談するにはちよつと抵抗がある。

それに、祥希くんはきょーちゃんとも知り合いだし、そんな人に相談するのは気恥ずかしかった。

「本当にどんなことでもいいの？」

「はなの悩みなら聞くよ」

最終確認のつもりで聞いた私に、祥希くんは頼もしく笑う。  
それに勇気付けられて、私は口を開いた。

「あのね……きよーちゃんにキスされちゃったの」

「え？」

「って言っても、最初にしたのははななんだけどね」

自分のそういう体験を、改めて言葉にするのはどこか照れくさい。  
恥ずかしい気持ちを隠して話す私の顔を見て、祥希くんは文字通り  
固まった。

やっぱり話さないほうが良かったのかもしれない。

けど、中途半端に相談するのも嫌で、私は話を続ける。

「キスしたのに、きよーちゃん、はなのこと好きじゃないって」

「……」

「きよーちゃん、何考えてるんだと思う……？」

期待させるだけ期待させておいて、好きじゃないって裏切るなんて  
考えられない。

好きでもない女の子にキスするなんて、きよーちゃんはひどい男だ。  
それとも、もしかして男の人は皆、好きじゃなくてもキスぐらい出  
来てしまうのか。

同じ男として祥希くんの意見を聞きたかった。

私の話を聞いて、祥希くんは難しい顔で黙り込んでしまった。  
その普段からは考えられない様子に、私は声をかける。

「祥希くん？」

「はな、俺にしないか？」

「え？」

隣り合った机の上、シャーペン握る右手を祥希くんの左手が掴む。その力の強さと続く言葉に、今度は私の動作が止まる。

「俺ははなのことが好きだ。葉山なんてやめろよ。報われないだろ」  
「……祥希くん」

思いがけない告白に頭の中が真っ白になった。

祥希くんが私のことを好きなんて、考えてもみなかった。祥希くんはずっと良いお友達で、もしかしたら美穂ちゃんが好きなのかも思ったことはあった。

でも、美穂ちゃんならまだしも私のことが好きなんて。そんな素振り少しも見せなかったのに。

どうして今になって私のことを好きだ何て言うのだろう。好きならもっと早く、私のことを好きだって言って欲しかった。私がきよーちゃんにべた惚れしてしまう前に。

祥希くんは悪くないのに、祥希くんを責める言葉ばかりが浮かぶ。そして、私は思ったことをそのまま口に出す。

「はなはどうして、祥希くんを好きにならなかったのかな……」  
「はな……」

「そうすればこんな苦しくなることもなかったのにっ！」

祥希くんを好きになれば、私はもっと楽になれた。

叶わない恋に身を焦がすことなく、年相応に幸せになれただろう。祥希くんは優しい人だ。きっと私を大切にしてくれる。

けれど、現実には全然楽しんかじゃない。  
大切にされるなんて夢のまた夢。

私は、不誠実なキスをする一回りも上の男が好きなのだ。  
幼馴染としては大事にしてくれても、女の子としては扱われない。  
でも嫌いになれない。それがひどく悔しい。

「弱音吐いてごめん、なさい。私、やっぱり」  
「はなっ！」

きよーちゃんが好きと続けようとした私の頭を祥希くんが乱暴に掴む。

そして、続きなんて聞きたくないと言わんばかりに祥希くんの肩口に押し付けられる。

もう片方の手は背中に回り、私は祥希くんに抱きしめられているのだと分かった。

好きな人がいるのに、他の人に抱きしめられていることの居心地の悪さに、私は身じろぎをする。

それにここは放課後の教室、誰か通りかかるかもしれない。

「やだっ、祥希くん」  
「今だけ」

持ったままのシャーペンで祥希くんを傷つけそうで、ロクな抵抗も出来ない。

だからせめて祥希くんの意思で放してもらえるように言葉で拒絶を伝えると、弱々しい低い声が返る。

「今だけでいいから……俺から逃げないでくれ」

喉の奥から無理やり搾り出したようなかすれたそれに、一瞬抵抗を忘れる。

その声に私は祥希くんを傷つけたことを知った。

私を好きと叫んだ人に、弱音を吐いて頼って、でも違う人が好きだなんて言おうとして。

ひたすらに思うことに疲れたからって、祥希くんに逃げようとして傷つけないはずがない。

私のずるさが余計に祥希くんを傷つけたんだ。

学ランの肩が私の涙で湿っていく。

「ごめんなさい、ごめん、なさっ」

「うん……」

謝るしかできない私の頭を祥希くんは優しい手付きでなでる。

私にはそんな優しくしてもらう資格なんてないのに。

いまこの瞬間にもきょーちゃんのことを考えてる私には、祥希くんの優しさに縋る権利などない。

でも、祥希くんの優しさが嬉しくて。

こんな私にも優しくしてくれる祥希くんに甘えていたくて、その手を振り払えない。

祥希くんは私がそんなことを考えているなんて思ってもみないだろう。

自分のずるさが嫌になる。

「俺ははなのこと好きだよ」  
「……私は」

耳元に囁かれる告白。

真剣なそれに私は正直に答えた。

「きよーちゃんのことが好きだよ……」

祥希くんを好きだと嘘をいうこともできた。

でも、きよーちゃん以外の人に好きだと言いたくなかった。

祥希くんに甘えることは出来ても、ただそれだけ。

思ってもいないことなんて言えない。

どれほど傷つけられても、私はきよーちゃんが好きで。

嘘でも他の人に好きだとは言えなかった。

「ごめんなさい」

自分の呟いた白々しい謝罪の言葉に、返る声はない。

それに、もう友達には戻れないのかもしれないと思った。

2011・07・08

## 8・恋愛朴念仁

風呂上り、タオルで髪をかき混ぜながら、ベランダで雪を見てる雅人に話しかける。

「お前さ、すごい年の離れた女と付き合ったことあるか？」

「……うん、あるよ。女子高生とか」

俺の唐突な話題にも動揺ひとつせず、雅人は答えを返す。

その答えが少しくらいおかしかったとしてもいつものことだから気にするだけ損だ。

俺のはんてんを着込んだ雅人がこのクソ寒い中ベランダでたばこをふかしてるのは、部屋に匂いがつくのが嫌で俺が無理やり追い出したからだった。

「どうだった？」

「何が？」

俺がシャワーを浴びてる間ずっと外にいたからか、雅人の鼻の頭は真っ赤になっていた。

その様子が少し不憫に思えて、俺はとりあえず話を中断した。

「……部屋、入れば？」

「じゃあ遠慮なく」

灰皿片手に部屋に入って、雅人は換気扇の下に立つ。

言葉とは裏腹で、律儀に言いつけを守る雅人を横目に、俺は冷蔵庫からパックジューズを取り出した。

「で、何？」

「なんていうか、ためらいはなかったのか？」

「……京大が何を言ってるかよく分からないよ」

雅人は、俺の言っていることが心底分からないとでも言うような顔だ。

逆に俺は雅人が何がわからないのか分からない。

ストローを袋から出し、パックにさして中身をすする。

ちよūdよく冷えた野菜ジュースは風呂上りの渴いた喉に染み渡っていくようだった。

「年の離れた子との恋愛に何か問題があるの？」

「そりゃあ、俺は大人だし法律的にも倫理的にも問題あるだろ」

それに俺は塾講師のはしくれなわけで、年上ならありえても、年下で生徒とか考えられない。

今までだって生徒に好意を持たれることは少なからずあった。でも、それが幼馴染だなんて、何の悪夢だ。

適当に誤魔化して逃げることなんて出来ない。

真正面から向き合う羽目になるだろう。

考えるだけで頭が痛かった。

「京大、君ね、そんなだから振られるんだよ」

「……それは関係ないだろ」

「大アリだね。……どうせはなちゃんとかあったんだろう？」

「う……」

妙に鋭い雅人に凶星を突かれて黙る。

静かになった俺の様子に何かを悟ったのか、雅人は大きく息を吐く。

「傷つけたの？」

「……」

「凶星。嘘がつけないね、京大」

貝のように口を閉じたままの俺に、雅人は灰皿に煙草を押し付け笑った。

その何もかもお見通しとでも言わんばかりの笑顔に腹が立つ。

俺はこいつが何を考えてるのか分からないのに、雅人ばかり俺のことを分かっているようで癪だった。

飲み終わったパックを思い切り潰し、雅人に近づく。

それをゴミ箱に捨て、二本目を吸おうとしてる雅人に手のひらを出した。

「それ、よこせ」

「……やめたんじゃなかったの？」

「むしろくしゃしてんだよ。吸いたい」

「君は昔からそうだよ。はい」

苦笑しながら渡されたシガレットケース。

一本取り出し、口にくわえ自前のライターで火をつける。

そつえば、部屋の隅でインテリアの一部になっていたこのライタ

ーは、昔の女からもらったものだった気がする。

煙草を吸うところやって余計なことまで思い出す。

思い切り吸い肺にいれると、苛々が少し収まっていく。

吐き出した煙は、部屋の中にゆるくただよい、換気扇の奥に消えた。

「何があつたの？」

「……キスされた」

「ふーん、最近の中学生は積極的だね。それで？」

そんなことは本題じゃないとも言つように、雅人が続きを促す。

俺が悪いと分かっているだけに、続きは言いたくなかったが、沈黙が俺を責めるようで痛かった。

もしかしたら、雅人は俺のしたことの予測がついているんじゃないかと思う。

ため息をつき、口を開く。

「からかつて誤魔化して押し倒したら怒った」

「……最悪だよ、京大」

観念してありのままを話すと、雅人は呆れた視線を寄こす。説教が始まりそんな気配に、目をそらす。

「君はね、語学だけじゃなく、恋愛のいろはを学ぶべきだよ」

「大きなお世話だ」

そう言い捨てて、煙草の灰をシンクに落とす。

頑なな俺の態度に、雅人は煙を吐きながら言った。

「はなちゃんも大切じゃないのかい？」

「……大切だけど、俺にとっては女じゃない」

大切じゃないわけがない。仲の良い幼馴染。

でも、俺にとっては妹のようなものだ。

はなの成長をずっと近くで見ってきたのだ。  
生まれてすぐに会っているし、オムツだって換えたことがある。  
おねしょをしたこと、コケて泣いたこと、月経の始まった時期です  
ら知っている。

そんなはなを女扱いしろということ自体が難しい。  
あときは勢いあまってキスなんてしまったが、それが間違い。  
どこかおかしかったのだ。

俺の言葉に雅人はその端正な顔を歪ませる。  
そして、俺を哀れむような目で見た。

「僕は悲しいよ、京大。こんなお馬鹿さんが友達だなんて」  
「馬鹿って……ヒモなんかやってるお前にだけは言われたくないぞ」  
雅人の批判が聞き捨てならなくて反論する。

大学卒業後、就職した俺と違って雅人は院に進んだ。  
在学中、そんなに勉強好きにも見えなかった雅人が院に進んだこと  
に驚いたが、それより先に雅人の懐具合を心配した。

雅人の家は母子家庭で、そんなに裕福じゃない。  
院に進む金なんかなかったはずなのだ。でも、雅人は院に行った。  
その理由を問うと雅人はあっけらかんとした顔で教えてくれたが、  
とんでもない内容に俺はそのとき飲んでいた茶を噴いた。

嘘つきな雅人の言うこと、どこまでが本当か分かったものじゃない  
が、雅人にはパトロンがいるらしい。  
肉体的な関係はないらしいが、それがまたうさんくさいことこの上

なかった。

何が気に入って雅人に金銭援助をしようと思ったのか知らないが、それを聞いたとき俺は頭の中が真っ白になった。理解できない世界だ。

会ったことはないがそいつの金で雅人は無事修士課程を終え、そして今は博士課程の真っ最中。

まだ続いていることにもげんなりしたが、続く内容に俺はまた茶をふき出した。

なんとパトロンが増えたらしい。しかもそれは一人じゃないのだ。雅人はそいつらのところを点々としながら、たまに俺のところを顔を出す。

悠々自適なヒモ生活、俺のところに来なくなっただって行く場所は沢山あるだろうに懲りずにやってくる。

いい加減友人をやめてしまいたいが、腐れ縁だ。

もう諦めている。

「自分に都合が悪くなったら相手の欠点を指摘して話をそらす。君の悪い癖だ」

「……お前も同じことしてるだろ。スルーしろよ、やな奴だな」

「僕は君の言うとおり嫌な奴だからね、スルーなんてしてやらないよ」

さっきの指摘がよほど気に障ったらしい。

こいつが意地の悪いねっとりとした言い回しをするときは、たいてい怒っている。

笑っているはずの目の威圧感に負ける。

雅人は怒れば怒るほど冷静になるタイプらしく、俺はこいつの口論で勝てた試しがない。

今回も勝てないだろう。

特に、今回は自分が悪い。勝てるはずがないのだ。

「そのー……悪かった……」

「……まあ、すぐ謝れるようになったんだから進歩してるかな。昔はもっと頑固だった」

「……」

素直に折れた俺が珍しいのか、雅人は嬉しそうに笑う。

そのむずがゆい態度に俺は無言のまま、煙草をくゆらせた。

謝ると負けた気がして、昔はめつたに謝罪なんかしなかった。

けど、27にもなれば人間変わるものだ。丸くもなる。

良くも悪くも俺は大人になった。

あの頃、嫌悪していたいい加減な大人になってしまったのだ。

今だって、はなとの微妙な関係をどう穏便にすませるかで頭がいっぱいだ。

俺たちは幼馴染だ。下手したら、親まで巻き込む大騒動になる。

そうなったら、年上の俺が責められるのは必至で、こういうとき幼馴染とはやっかいだと実感する。

いい点もないわけじゃないが、総じて女は面倒くさいのだ。

俗に言う『痴情のもつれ』が嫌で、最近女と距離を置いていたのに。

とんだところに地雷があったものだ。

俺の考えていることなど手に取るようにわかるのだろう。  
クスクスと面白そうに雅人が笑う。

「宿題をあげるよ、京大。得意だったろう？ はなちゃんに謝りに行くんだ」

「……言われなくても行くつもりだった」

はなともう三週間も会ってなかった。

いつもはなが会いに来るから分らなかった。

俺たちはどちらかが会いたいと思わなければ、こんなにも遠いのだ。

年齢も離れてるし、共通の友人もない。

幼馴染という細かい細いつながりだけが俺たちを支えているに過ぎない。

このままだと、もうずっと会わなくなるだろう。

はなはあれで頑固だ。

俺が折れなきゃいつまでも平行線。

謝りにいかなければいけなかった。

「誤魔化さずに返事もするんだよ」

「分かってる」

「本当かな？ 君は結構朴念仁だからなー」

雅人が疑り深い顔で煙草をふかす。

その態度が少し気に障って、俺は灰皿に短くなった煙草を押し付けた。

「朴念仁？」

「女ごころがわからないってことさ」

雅人の言葉に首を傾げながら、窓を開ける。

暖かい部屋に外気が入り込み、雅人が寒そうに肩を縮こませた。それにしてやったりと思った。

「お前みたいに女たらしこむの上手くないからな」

「……僕のことを悪い男みたいに言わないでくれない？」

俺の言葉が気に食わないのか、雅人は不機嫌顔だ。

でも、事実だ。

雅人の女癖は在学中からひどかった。

基本来るもの拒まず去るもの追わずで、女受けする甘い顔立ち。

何度相談を受け、告白の手伝いをし、修羅場に巻き込まれたことか。

雅人はあのと時のまま何も変わらない。

もしかしたら、この何年間の間にパワーアップしているかもしれない。

そう考えると最悪だ。

「実際たらしこんでヒモになってるだろ」

「それはね、京大。彼女たちが僕の世話がしたいっていうから、喜んでお世話になっているだけだよ」

何にも分からないといった無害そうな顔をして、そうやって女を騙してきたんだろう。

今はその能力が少しだけうらやましい。

俺にもこいつぐらいの器用さがあれば、あんな風にはなを泣かさな

いすんだのかもしれない。

でも、それを言うとなんだか負けたようでプライドが邪魔をする。  
俺は本心を隠すために冷たく言い捨てた。

「いつか刺される」

「君が泣いてくれるなら、それもいいかもしれないね」

「お前、キモい」

雅人の本気っぽい目に鳥肌が立つ。

開けっ放しの窓に合点がたって、俺は窓を閉めた。

2011・07・22

## 9・独占欲発露

「葉山先生」

教員室の引き戸から出てきた見慣れた制服に固まる。はなかと身構えたが、俺の予想はすぐに裏切られた。

「……………ああ、松山か」

よくよく考えたら、はなは松山美穂みたいに髪の毛を染めたりしていないし、化粧が濃かったりもしない。

それに彼女ほど頭も良くなかった。

二人は正反対でどうして友達をやっているのか少し疑問だ。

「久しぶりに会った気がしますね」

「最近バタバタ忙しかったからなー」

今日みたいに講義のない日は珍しかった。自習しに来た生徒に自習室は開放しているが、彼女はどうしてここにいるのだろうか。

ここは教員室。普段生徒は近づかない場所だ。

何かあったのだろうか。

「何か用か？」

「合格したので報告に」

「……………ああ、君は県外だったか」

松山の志望校を思い出す。

彼女はその頭の良さを活かして、偏差値の高い県外の進学校を志望

していた。

県外の高校は受験日が少し早い。  
合格したなら、はなとは高校は別々になる。

そういえば、はなが悲しがっていたのを聞いた気がした。  
もう遠い昔のようだ。

「合格おめでとう」

「はい、今までお世話になりました」

「……いや、俺で力になれたならよかったよ」

俺の言葉に松山は礼儀正しく頭を下げる。

話は済んだだろうと思いい、教員室の扉に手をかけた。

そんな俺の腕を松山は容赦なくガシリと掴む。

まだ話があるのだろうか。

「何か用か？」

「先生こそ私に用がありませんか？」

にっこりと笑って言う松山の言葉に首を傾げる。  
心当たりがない。

「はなの試験日明日ですね」

「あ……ああ、そうだな」

触れられなくなかった核心に彼女は難なく触る。  
その遠慮のなさに思わず舌打ちしたくなかったが、仮にも生徒の前だ。  
講師としての態度を崩したくなかった。

「気を悪くしましたか？」

「……いや、不意打ちだったからね」

にっこり笑う松山の顔は確信犯だ。  
これだから賢い子は面倒くさい。

はなくらい扱いやすい子ばかりだと俺の仕事も楽になるんだがそれは高望み過ぎるだろう。

ため息をついて嫌々口を開く。

「はなのことで何か話か？」

「ええ、先生、空き教室行きませんか？」

なるべくなら早く切り上げて自分で自分から本題に触れた。  
面倒くさいと思った俺の気配を感じたのか、松山が俺の右腕を締め上げる。

その力の強さに眉をしかめ、俺は松山の腕に手を添えた。

「放しなさい、逃げないから」

「先生、セクハラですか？」

セクハラの一言にパツと手を離す。

誰かに聞かれたら退職もありうる。

してもいないセクハラで免職なんてたまつたもんじゃない。

「……松山、いい性格してるよな」

「お褒めに預かり光栄です」

俺が手を離すことをわかっている言動だろう。

褒めてないのににっこり微笑まれて拍子が抜けた。

彼女に腕を掴まれたまま、近くの空き教室に入る。

途端解放された腕で教室のドアを半分閉めた。

またセクハラ扱いされてはたまらないが、人に聞かれてはまずい。はなと俺はここではただの講師と生徒なのだ。今はその関係ですら怪しい気もするが。

「で、何の用だ？」

「はなからどこまで聞いてます？」

「どこまでって、最近めつきり連絡してこないぞ、あいつ」

持っていた鞆を手近の机に置き、松山は俺に向き直る。

質問に質問で返す松山に俺は本当のことを言った。

あの言い争い以来、一ヶ月半はなから連絡が途絶えている。

俺もあいつも携帯だって持ってるし、お互いの家も近い。

連絡しようと、会おうと思えばいくらでもできるはずなのだ。

でも、何故か気が進まない。

家に行こうとしても、メールを打とうとしても、手が止まってしま  
う。

こんな状態はよくないと思っているし、気に食わないが、俺には宿  
題もある。

はなに謝らなければいけない。

俺が悪いと素直に認めることが出来るのに、どうして会いにいけな  
いのか。

「あれ、あの子本当に言わなかったんですね」

「だから何を」

行儀悪く机に腰掛け、腕を組んでいた松山が首を傾げる。  
その心底不思議そうな表情に俺のほうが問いたい。

「はな、澤田くん 祥希に告白されたって」

「え……」

予想外の言葉に、俺は開いた口がふさがらない。  
そんな俺を、松山は面白がるような目で見た。

「……予想もしてませんでした？」

「まあな」

平静を取り繕っても、松山にはもう俺の動揺なんてバレバレだろう。  
でも、教師としてのプライドが俺にあからさまに慌てることを許してくれなかった。

はなが澤田に告白された。

信じられなかったが、澤田ははなのことが好きなのだ。十分にありえる。

秋のある日、俺に牽制してきたことを思い出す。

あのあとそれ以上なんの接触もなければ、はなの様子がおかしいこともなかった。

だから、完全に油断していた。

あいつにはそんなことはできないと、どこか高をくくっていたのだ。  
その結果がこの日まで、俺は衝撃に一言も発することが出来なかった。

でもそれ以上にショックなのは、はなが俺にそんな大事なことを隠

していたことだ。

いつもなら真つ先に俺に相談してくれるはずのはなが、俺には一言も言わず黙っていた。

その事実が俺の心に影を落とす。

俺が沈んだのを察したのか、松山は気遣うように口を開いた。

「あの子が先生に隠し事するなんて珍しいですね」

「……俺は嫌われちゃったからな」

自虐的に言う俺に松山は冷たい顔。

同情くらいしてくれたっていいじゃないかと思った俺に松山は冷静だった。

「嘘ですよ。先生も分かってるでしょう?」

「……」

松山はそう断定してくれたが、どこか納得できなかった。

はなが口にした『嫌い』は、喧嘩中思わず出してしまった言葉である。う。

言葉のあやだろつことは分かってる。

でも、それは自分でも思った以上に俺の心に突き刺さっていたように。

会いに行きたいのに腰が重たいのは、はなはもう嫌いな俺に会いたくないんじゃないかって不安だからだ。

我ながら女々しい奴だとは思っ。

けれど、不安がる心をとめることができない。

澤田の告白にはなはなんて答えたのだろう。  
はなの答えを知りたいような、知りたくないような複雑な気分だ。  
先を越されたという思いと、はなの答えを知りたいと思う心が交錯する。  
頭の中がぐちゃぐちゃだ。

もしかしたら、恋をしているのかもしれない。  
ただの独占欲なのかもしれない。  
でも、澤田には渡したくない。  
それだけで、はなの手をとっていいのだろうか。

黙り込む俺に松山は意地悪く笑う。

「誤魔化さないで、気持ち伝えてくださいね」

「……松山、君はどこまで知ってるんだ？」

「ほぼ全部です」

悪びれずしれつと言う松山に頭が痛くなりそうだ。  
あいつは親友だからって松山に何でも話しているのか。  
はなの口が軽いと知る。これだって今までは知らなかった事実だ。

「はなは先生のこと、本気で好きです」

「でも、澤田に告白されたんだろ？」

「……それくらいではなが心変わりすると思ってるんですか？」

松山の瞳に怒りが浮かぶ。

それに俺は早々に白旗を揚げた。

「馬鹿なこと言った。忘れてくれ」

「嫌ですよ。ちゃんとはなに言いつけます」

まだ怒っているのか、松山は底意地の悪いことを言う。そんなことされたら、仲直りしようと思っっているのに、仲直りできなくなってしまうじゃないか。

「謝りに行くこうと思ってるんだ。だから、これ以上は」

「……仕方ないですね。それなら黙っていてあげますよ」

必死に説得しようとした俺に、松山は悪戯っこみtainな顔で言った。この言葉を俺から引き出したかっただけか。騙された。

「はなのこと本気で考えてください。それで内緒にしておいてあげます」

真剣な表情で松山は俺を見つめる。

俺の真意を探っているかのような視線に居心地が悪い。

本気で考えたら、こんな面倒な関係、心底ごめんだ。

親同士は仲が良く、はなは俺の生徒。

年の差だって十二もあるし、第一はなは俺の好みとは正反対の女だ。

でも、はなが誰か他の奴のものになるのは嫌だった。

大事に大事に守ってきたのだ。

一番長く一緒にいたのだ。

ぱっと出のどこの骨とも知らない男にさらわれたくなどない。

好きだ。

子供っぽい仕草が、小さい身体が、すぐ不機嫌になるところも好きだ。

お馬鹿なところを、笑った顔もこれからも守っていききたい。

今までちつとも定まらなかった心が決まる。  
妙に清々しい気分だった。

そんな俺の表情を見て、松山は合点がいったようだった。  
俺のきっかけをくれた松山に礼を言う。

「……ありがとう、松山」

「まあ、生徒の分際で生意気ですけどね」

そうつぶつぶ松山は『生徒』と言う割に大人びていて、微笑みが未  
恐ろしく思えた。

2011・10・26

## 10・私の好きな人

部屋のドアを開けた瞬間、そこにいた人物に私は固まった。

「何できょーちゃんがいるの」

「まなさんがここで待ってるって」

きょーちゃんはテーブルの前で行儀悪く足を広げていた。

ネクタイをだらしくゆるめ、優雅に紅茶なんて飲んでいる。

スーツの上着なんて私のお気に入りのハンガーに掛けている始末だ。

人の部屋で最大限くつろぐきょーちゃんに眉をしかめる。

疲れて帰ってきた日にきょーちゃんになんか会いたくなかった。

今まで一月以上連絡しなかったくせに、よりもよって今日来るのか。

ドアを閉め機嫌悪く鞆を定位置に置く私の顔を見ながら、きょーちゃんは私を労わるように言った。

「受験お疲れ」

「……知ってたのにどうして今日来るの」

今日が受験日だって知っていたなら、もう少しそつとしておいて欲しかったのに。

持てる力すべて出し切って頭も体も疲れたのだ。

全力は尽くしたけど、はつきり言って自信はない。

元々賭けのような志望校だった。受かるかどうかは五分五分だ。

帰ってきたら、答えあわせをしたり、これからのことを考えるつも

りだったのに。  
きよーちゃんのせいで台無しだ。

恨みがましくきよーちゃんをジト目で睨むと、唐突にきよーちゃん  
は言った。

「澤田に告白されたんだってな」  
「なっ……」

その言葉に驚いて振り返る。  
思わずきよーちゃんと目を合わせてしまつて、すぐにそらす。  
ブレザーを手荒く脱いでハンガーにかけた。

「突然来たと思つたらなんなの？ どこで聞いたのっ！」

「松山に聞いた」  
「え、美穂ちゃんに？」

予想もしなかつた名前に言葉を失う。  
二人が会話するとしたら塾だけど、そんなタイミングよく私の話な  
んて出来るんだろうか。  
もしかしたら、私がずっと勉強も上の空できよーちゃんのことを考  
えてたから、気を遣ってくれたのかもしれない。  
その親切は嬉しいけど、空気を読めないきよーちゃんのせいでぶち  
壊した。

きよーちゃんがいるから着替えもできずに制服のまま、きよーちゃ  
んの斜め前に座った。  
私をじつと見つめるきよーちゃんの視線に居心地が悪かった。

「澤田と付き合うのか？」

「……そうかもね」

シワになりそうなプリーツを手で伸ばしながら、きよーちゃんに返事をする。

美穂ちゃんには私がどう返事したか伝えてあったのに言わなかったらしい。

自分で解決しろってことだろう。自分にも他人にも厳しい美穂ちゃんらしい。

適当なことを言ったことに気づかれないかドキドキする。

そんな私の様子に何かを感じたのか、きよーちゃんはテーブルに身を乗り出した。

「やめるよ」

「え……」

突然近づいてきたきよーちゃんに鼓動が早くなる。

何か私に都合のいいことを言ってくれるんじゃないかと期待する。

「お前、俺のこと好きじゃなかったのか？」

「……だって、きよーちゃんは私のことなんか好きじゃないじゃないかい」

きよーちゃんの口から出た言葉にがっかりしながら投げやりに答えた。

好きじゃなかったのかなんて愚問だ。好きに決まってる。

そんなことを今更確認するなんて、きよーちゃんは私の気持ちを甘く見すぎだ。

好きで好きで好きすぎて辛くて、それでもきょーちゃんが好きで、恋におかしくなっているのだ。

私を思ってくれる優しい祥希くんに縋ることも考えなかったわけじゃない。

そのほうが断然楽だ。

浴びるように愛情を注いでくれるだろう相手に心が揺れた。

でも、私はきょーちゃんが好き。

きょーちゃんは私のことが好きじゃなくて、幼馴染だと思っ  
ていても。

一方通行の恋だともう諦めているのだ。

そんな私にわざわざ俺のことが好きだと聞くのか。

いま自分が置かれている状況のひどさに、怒りが膨れ上がる。

頭に血が上っているのか、目眩がする。

「きょーちゃんは私のこと、幼馴染としてしか見てないんだから諦めるしかないじゃない。どうしろっていつのよっ!!」

「はな」

「私だって、私だって、女の子なのに……」

怒りのあまり、言葉が浮かんでこない。

こんなにないがしろにされて、それでもなおきょーちゃんを想っているだけでも言うのか。

そんな傲慢、好きな人でも許せない。

胸がつまって言葉の出ない私を見てきょーちゃんが腰を上げる。

中腰のままこちらに近づいてくるきょーちゃんに私は後ずさる。

「来ないで」

「はな」

「いや、触らないで」

後ずさつても狭い部屋ではすぐに壁にぶつかる。

逃げ場のなくなった私にきょーちゃんは真剣な顔で接近する。

それが怖くて、でたらめに両手を振るうと、それはすぐに大きな手に掴まれた。

びくともしない力に涙がにじむ。

「好きじゃないなら触らないで！」

「なら、問題ないな」

「え」

精一杯の力で怒鳴ると、きょーちゃんは平然とした顔でそう言った。

言葉の意味が分からなくて、私は二の句が告げない。

黙り込んだ私の顔にきょーちゃんの顔が迫る。

それに前会った日を思い出して、強く目を瞑った。

ほどなく触れるおでこの感触。

驚いて目を開け、そこを押さえた。

少し照れたきょーちゃんの顔が目の前にあった。

「今はここまでだ」

「……」

「この前のこともごめん。俺が悪かった」

神妙な顔であやまるきょーちゃんの目をまともに見れない。

恥ずかしいと同時にどこか泣きたかった。

「あと5年待て」

「……………どうして?」

「俺の心境的な問題だ」

それがきよーちゃんの答えなのだろう。

私が二十歳に、大人になって何の問題もなくなるまで待っているというのか。

真面目で融通の利かないきよーちゃんらしい。

そんなところも好きで好きでたまらない。

挑発的な目をするきよーちゃんと視線を合わせた。

これだけ近づけば、言葉にしなくてもきよーちゃんの気持ちは伝わる。

「俺を好きなら5年くらい待てるだろ?」

「……………5年後なんて、きよーちゃん、オッサンじゃない」

「オッサン言うな」

にやけそうな顔をどうにか抑えるため、憎まれ口を叩く。

これがいまきよーちゃんにできる最大限の譲歩なのだろう。

大丈夫。10年以上待てた。

あと5年なんて大したことない。

それに今までの10年とは違う。意味のある5年だ。

きよーちゃんを好きでいい、約束のある5年。

嬉しくて、嬉しくて、こらえきれなくて、私は笑った。

「オッサン」

「言うな」

「オッサン、オッサン、オッサン」

「お前な」

からかう口調の私にきょーちゃんが頭を撫でる。  
たまらずその胸に抱きついて顔をうずめた。

「オッサン、でも好き」

「……おう」

やっと叶った恋に涙が出た。

2011・11・23

## 11・深愛開花

「見て、きよーちゃん！」

大き目の鍋に水をたっぷり入れ、火にかける。

忙しい俺をご機嫌に呼ぶはなに呆れつつふり返る。

スカートのプリーツを翻して、はなは天真爛漫に笑った。

「似合う？」

「うん、似合うよ」

春から通う高校の制服を見せびらかすはなに、俺は気の抜けた返事をする。

あのあと色々あったが、はなは無事志望校に受かった。

その一報を受けたとき、どれだけホッとしたことか。

点数開示で、合格点すれすれで受かったことを知ったときは思わず顔がひきつったけれど、合格は合格。

卒業式が終われば、はなも花の女子高校生だ。

「この制服、可愛くない？」

「あー、可愛いよ」

高校の制服を着こんではしゃぐはなを見てると本当に受かってよかったと思う。

紺色のセーラーに入った三本ライン、胸元のリボンがはなが動くたびに揺れる。

まな板に向き直り包丁を手に取り、洗った水菜を適当に切っていく。

「あー、受かってよかった」  
「おめでとう」

このやりとりも五回めだが、それだけ嬉しいのだろう。  
次第にやる気のない返答になっていく俺に気づかないくらい、はなはにやけ顔だ。

「えへへ、私ね……あと5ヶ月で16歳なんだよ！」

生ハムを刻むのに忙しい俺に、拗ねたのか顔を覗き込んでくるはな。包丁を持つてるそばで突然動かれて、その行動に肝が冷える。

「危ないだろ」  
「あ、ごめんごめん」

俺が持っているものをようやく思い出したのか、はなは少し距離をとった。

「で、なんだって?」  
「私あと少して16歳なんだよ。結婚できるよ!」

何を言い出すかと思えば、わざわざそんな分かっていること。言いたいことは予測できるが面倒で、俺はチーズをカットしながら続きを促した。

「待っててね」  
「何を?」

「私。……早く大人になってやるんだから」

この前の約束のことを言っているのだろう。

早くいったって、約束の5年後は当分先だ。

今まで十分待っただろうはなが焦れるのも分からなくはない。

でも俺は、そんなに早く大人にならなくてもいいと思っている。

はなには返答せず、俺は淡々と調理を続ける。

パスタを二人分とり、沸騰した鍋に投入する。

フライパンにオリーブオイルをいれ、火にかける。

温まり香りたってきたそこに、さっきカットしたチーズと生クリームを入れた。

次第に煮詰まってくるソースに生ハムと水菜を絡める。

「ほら、そろそろ出来るから仕度しろ」

「はい」

フォークやコップを出してウロウロするはなを横目に、茹で上がったパスタをフライパンに加えた。  
美味そうなチーズの匂い。

はなのリクエストで作った、いつもよりちょっと豪華なパスタ。器に綺麗に盛って、最後にベビーリーフを乗せて完成だ。

パスタ皿を持ち運び、こたつに早々に入ってるはなの前に置く。

「召し上がれ」

「いただきます」

手を合わせフォークを手に持ち、くるりとスパゲティを巻く。

口に含んで咀嚼して飲み込むその顔のとろけそうなこと。大人にならなくても、ほらこんなにも可愛い。

「おい、はな」

「ん？」

「愛してるぞ」

「なっ　！？」

パスタが喉につまったのか、はなが苦しそうに胸を叩く。

背後に回り、その背を撫でると、ようやく嚙下できたのか、はなは恨めしそうな目で俺を見た。

「きょーちゃんの馬鹿……」

「思ったこと言っただけだろ？」

息が詰まっていたのだろう、涙目で見上げるはなも愛くるしいと思う。

パスタを食べてるときに言うことじゃなかったかもしれないが事実だ。

俺がはなをすきなのは疑いようもなく、前はどうしてあんなに躊躇っていたのか分からない。

もしかしたら、つまらないちょっとしたプライドだったのかもしれない。

こんなに年下の女の子に落とされたなんて認めたくなかっただけかも。

くだらない感情でずいぶん遠回りをしたものだ。

はなの頭をすりと撫で、長い髪の毛を指ですく。

俺の一連の動作にはなは目元を赤く染めた。

「はな？」

「あーっ、もうきよーちゃんなんてっ！」

突然挙動不審になったはなに驚きつつも、続きを急かした。

言葉にするのが恥ずかしいか、はなの視線がキョロキョロと動く。

それだけではなが何を言いたいのか手にとるように分かった。

「大っ」

「大……？」

「……大好きだもんっ！！」

からかい混じりに聞いた俺の言葉に頬を赤らめ、大声で好意を口に  
するはなは可愛く。

これからもずっと俺のただ一人の天使なのだろうと思った。

2011・12・22

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6912z/>

---

アネラ

2011年12月23日04時48分発行